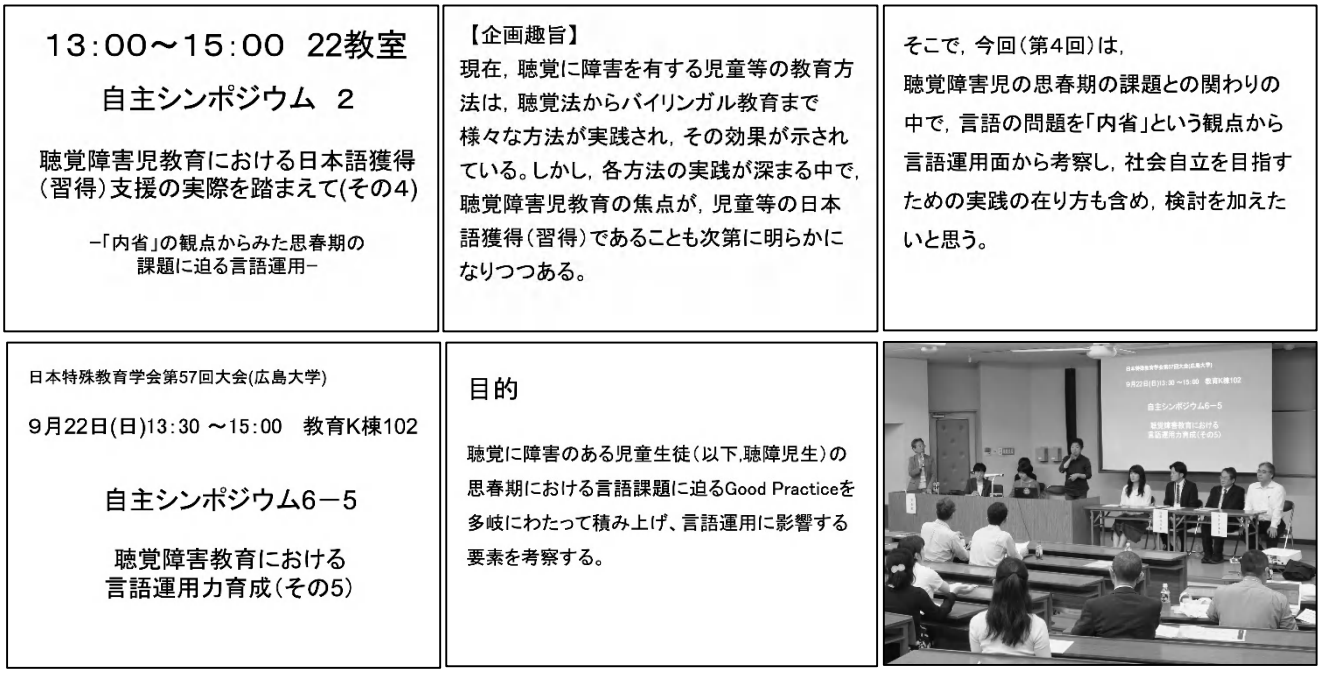
## はじめに　－本書の内容紹介とガイダンスをかねて

### 本書の内容と構成

本書は以下の10回の日本特殊教育学会・自主シンポジウムの記録を整理し考察を加えたものである。全てを掲載はできなかったが，大要はお伝えできることと信ずる。特にことわりのない場合，本書中のシンポあるいはシンポジウムという用語は下記のいずれか又は双方を指す。

「聴覚障害教育における日本語獲得(習得)支援の実際を踏まえて」(2009～2014；2011 を除く）

「聴覚障害教育における言語運用力育成」（2015～2019）




第１章は，シンポジウムの出発にあたっての問題意識と 10 年にわたる歩みを紹介している。

第２章は，シンポジウムの各報告をもとに，話題提供者が原稿を作成した。

第３章は，指定討論の任にあたった４名が，報告に考察や補足を加え論考を展開している。

### 「言語運用」とは何かをめぐって

作成にあたり「言語能力と言語運用を峻別する」との Chomsky の理論を出発点とした。学説や研究の発展を踏まえての「言語運用」「言語運用力」「言語運用能力」といった関連する用語についても，検討を進め第３章でも言及をしている。その章末には一括して文献も示し参照に供している。しかしながら，限られた時間の中でこれらの用語を確認し整理することは私達の手に余る課題であった。この点については，識者の言と研究の進展を俟つものである。

私達の原点は副題にあるような Good Practice の集成であり，「言語運用」を理論的に深めることを第一の目的としてきたわけではない。議論を重ねる中で，実践を構想したり分析を進めたりするためには，従来の「言葉の力を育てる取組」を踏まえながら「言語運用」の問題に踏み込むことが必要で有益ではないかと考え始めた。この視点を整理したのが，次に示す言語モデルである。

### 言語モデルの名称とその内容

以下の言語モデルは本書で繰り返し使われ，かつ重要な概念を整理するものである。読者の便宜を

考えてあらかじめお示しする。その意義や内実は第１章と第３章で詳しく触れる。

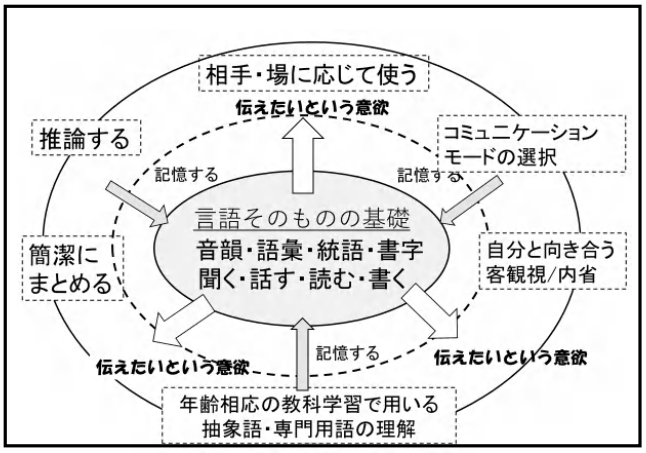



図１　言語運用にかかわる高井モデル

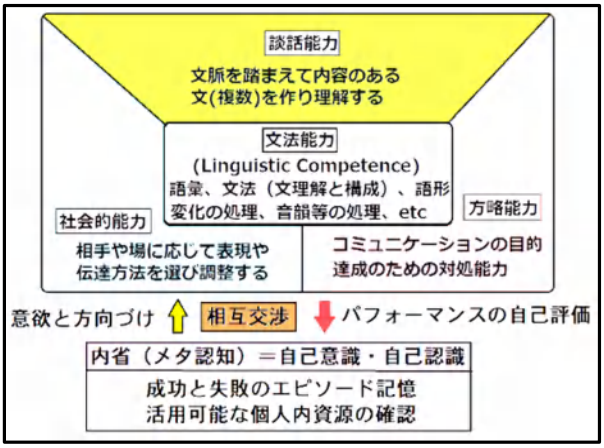



図２　第二言語習得研究を援用した言語運用モデル

## 本書の作成と送付にあたって

本書の作成にあたって，京都光華女子大学と公益財団法人日本教育公務員弘済会京都支部より助成を受けて発刊することができた。また，聴覚障害教育振興会より奨励賞をいただいたことで，本書を全国の聾学校をはじめとする関係機関に送付できることとなった。ここに記して謝意を表したい。

LaPHICY 聴覚障害教育における「言語運用」を考える会
編者一同